



政治家



小川淳也の真摯な政治

私たちは、なぜ政治家を志したのか。

読売新聞 (2006年1月1日付)より
小川 私は総務省にいたが、世の中の仕組みを変えるのは、役所の限界を超えており、政治家がやらなければいけない。そこへ自分が出て、賭けてみたい、と考えました。



小川淳也氏

日本をどこに導かなければならないのか。

産経新聞 (2011年1月7日付)より
小川氏 日本は人口減少時代に突入し、なおかつ高齢化率が40%にいく。ここから40年が最大の変化になる。成長期前に作られた仕組みをいかに成長時代の国家経営に変えられるか。そのときに求められる政治判断や国民への説得は今までと格段に違つはずだ。そういう大きな問題意識を持って、ぜひ党派を超えて一緒にやりたい。

そのための最初の一步は国会そのものの変革。

読売新聞 (2006年1月1日付)より
小川 国会は欠席とヤジが多いことに驚きました。我々は「意見が違つても相手の話は聞け」と教わってきたはずなのに。

産経新聞 (2011年1月6日付)より
小川氏 今のような非生産的な国会から建設的な国会に作り替えるかは、僕らの世代に課せられた大きな命題だろう。

産経新聞 (2011年1月7日付)より
小川氏 僕らの世代でやらないと、30年、40年国会にいる人たちには無理だ。これが当たり前と思つていいるから…。

政治家の寿命

読売新聞 (2006年1月1日付)より
小川 自分の政治生活は20年と想定しています。50代前半からは私的な人生を過ごしたい。その代わり20年間は命がけで、もう一つの政権与党を作る。1期目は、人間関係を広げ、強靱にすることもに、20、30年先の日本に何が必要かを考え抜きたい。

私たち自身にも寿命があることを意識しつつ、取り組まねばならない。その意味では、現在アメリカ大統領選で予備選挙が行われています。国会議員選挙でも、必ず予備選挙が実施されていると聞きます。日本でも私ども現職の国会議員を含めて、各党の予備選挙が各選挙区で行われてしかるべき、そんな思いすらあります。

後日説

長期的な展望を持つて議論すべきことを主張した年末の党税制調査会、お陰様でそこでは二〇五〇年から二二〇〇年頃までの人口動態を示したグラフを常に机に広げ、議論することが当たり前になりました。税制と社会保障をめぐる議論の過程で、説明にきた官僚に「日本の人口はいつ減少し始めたか知っていますか(小川)」「二一〜三年前でしょうか?」「二二〇〇五年でしょうか!」「(小川)」。高齢化はいつピークを打つか、知っていますか(小川)」「二二〇二〇年!?!?」「ごろう!?!」「二二〇五〇年でしょうか!」「(小川)「思わず強い調子で言つてしまいました。

「長期展望をもつて真摯に国民に問いかけなければなりません(小川)」
「私どもも二二〇二〇年までの絵姿は示しました。しかし当時の政権は消費税10%までは議論するがその先は責任を持ってないと言われました。それが、この国の政治の現実なのです」官僚もさすがに涙目、真剣でした。
私はハツと我に返り、「申し訳ない。そこはあなたたちに負わせる課題ではない。私たちが政治家こそが負わなければならない問題の核心だ。私はこれからもこの議論で官僚の皆さんと厳しく対峙する。しかし、それも一重に新しい時代に必要な、新しい政治を創るための産みの苦しみと思つて、真正面から向き合つてほしい!」(小川)「分かりました。まれに見る長期的なことを考えている政治家ですわ。:。」
国民の皆様には信じ難いエピソードかも知れませんが、これが今の一面の現実です。ここから変えていかなければなりません。

最後までお目通しくださり本当にありがとうございます。今年、2012年が皆様にとりまして素晴らしい年でありますことを心よりお祈り申し上げます。

2012年

衆議院議員

小川淳也

拝